

第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」④

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第4節 神社合祀反対運動とエコロジー

「一っ広い世界や国中に 石も立木も無いかいな」に始まり、「八ッ山の中へと入り込んで 石も立木も見ておいた」、「九ッこの木伐らうか あの石と思へど神の胸次第」、「十ッこのたび一列に 澄みきりましたが胸の内」で終わる、「みかぐらうた」八下り目の歌を舞い踊っていたある日の早朝、わたくしは同時に「山中の水の中いと入込んで 如何なる水も澄ます事なり」（二—27）、「これからは神が表い現れて 山いかゝりて掃除するぞや」（三—53）などという「おふでさき」のお歌を想い出していた。踊りながら山中と心澄みますが二つ一つになっているのに気づき、その気づきから、思いは南方熊楠が森を内側から生き、呼吸した生命の世界を分離して考えられないような錯覚に陥る。大げさに言えば、ここで歌われている山中の立木の根の保水力、澄みきった溪流や、たとえば神としてあがめられてきた由緒ある磐座に、樹木やさまざまな動植物、昆虫、粘菌等々に至るまで複雑極まりない自然山林は、カオスのようでありながら、人間を救済する、あるいはまた絶滅させる微細かつ巨大な神秘的秩序を持っているというその存在価値についてである。

コスモスで保たれている原生林を破壊することは、「この世界山ぐえ等も雷も 地震大風月日立腹」（六一—91）というお歌にあらわれた自然災害の報復を招くことになるのではないかという思案である。ちょうどこの節を書いているとき、熊楠の「やりあて」であろうか、巨石愛好の仲間と「いわくら学会」を2004年に設立し、いま病床にある畏友建築家・渡辺豊和（工学博士東京大学）から氏の近著『縄文スーパーグラフィック文明』（ヒカルランド、2016年5月31日）の大冊が届いた。渡辺は、縄文日本は地球物理学と宇宙天文学を極め尽し、自然と調和した縄文日本が世界最先端をリードしていた。この隠された天球の写し絵「地上天球図」の縄文日本のスピリットの再生こそが、未来の地球に向けた処方箋だと解説・喝破する。

原神道はもともと常設の社殿をもたず、自然の森などの聖地とさだめたところに神籬などを立てて、祭りのたびに神霊を迎えていた。古い日本語では「やしろ」とはその儀礼をおこなうために、仮にしつらえられた「屋代」設備のことを意味していた。天理教祖が自らの立場を指す「月日のやしろ」の「やしろ」も「月日の社」より、初期の信者には身近に感じられたであろう。社殿を置くことが始まったのは、木造建築が発達してからである。わが国は農業が明治中期まで基幹産業だったから、古神道の儀礼も農耕儀礼が主で、春の祈念祭と秋の新嘗祭が重視された。豊穣のための降神を祈る祭りは本来森そのものが神社だったから、森の内部空間は聖なるものとして守られていた。しかし、明治39年（1906）12月、当時の西園寺内閣の内相であった原敬は、一町村につき、神社は一社にまとめよという神社合祀令を出したのであった。その目的は日露戦争後の国家の危機の時代に、国民のアイデンティティを強化し、国家による神社保護を徹底することにあった。その結果1905年に19万5千社あったものが1910年には14万1千社に減少した。合祀による神社の廃止と森林の伐採は、三重県と和歌山県で猛威を振るい、とくに南方熊楠の住んでいた西牟婁郡では、村社128社のうち78社を併合して50社とし、無格社195社のうち、184社を併合して11社としたのであった（平野威馬雄『大博物学者—南方熊楠の生涯』リプロポート、50頁）。廃社となった産土神社の森林の伐採の後には、殺風景な畑がひろがり、切り倒された巨大な産土の樹木を売って、官幣大社、県社、郷社の大伽藍に利用する。そのため私腹を肥やす官吏や神職まで現れたと言われる。近代の資本主義は国家と共働するように森の樹木を商品化したのであった。社の格付けは、床次竹二郎の欧米視察の報告を受け、欧米においてはキリスト教の立派な伽藍がある、日本の神社ももっと立派なものにしなければという間違った報告書に、政府

が従ったものであったといわれる（鶴見和子『遺言—斃れてのち元まる』藤原書店、63頁）。また産土の神社を失った村人たちは、合祀先の大社まで出かけなければならず、村々はかれらの自然環境だけではなく歴史をも奪われようとしていた。どの神社を残して、どの神社を壊すか、その決断は地方の役人に任されたのであった。一番数多く壊された神社の数は三重県と和歌山県である。そこで敢然として反対運動に立ち上がったのが、和歌山県田辺市に定住していた南方熊楠である。南方はエコロジーという学問が欧米で発祥しているのを知っていて、その学問的理論に基づいて活動を開始した。柳田國男も熊楠の雑誌や新聞に掲載された反対理由を読んで「南方二書」という文書を自費で印刷し、政財界の有力者にひろく配布したといわれる。

鶴見和子はエコロジーということばをかかげ、神社合祀反対運動の自然保護活動をおこなったのは、日本では南方熊楠をもって嚆矢とし、それは足尾鋇毒事件における田中正造のたたかいと並んで、近代日本の自然保全運動のさきがけであり、その実践活動は南方の生涯における唯一の輝かしい実践活動であったと評価している（鶴見和子・中村桂子『四十億年の私の「生命」—生命誌と内発的発展論』藤原書店、98～101頁）。熊楠は自然生態系を基礎において、エコロジーの概念を、植物学・微生物学から、歴史、民俗、経済、社会、政治の領域まで広げて考えていたという。それは彼のつぎの8つの点を主たる反対理由として起ち上がった関連をみるとあきらかである。その第一は、合祀によって敬神の念が高まるなどというのは、地方官吏の報告書にたぶらかされること甚だしき事。第二は、合祀は人民の融和をさまたげ、自治機関の運用を阻害すること。第三は、合祀は地方を衰微せしむる事。第四は、合祀は国民の慰安をうばい、人情を薄くし風俗を害すること夥しい事。第五は、合祀は愛国心を損する事夥しい事。第六は、合祀は土地の治安と利益に大害ある事。第七は、合祀は史蹟と古伝を滅却する事。第八は、合祀は天然風景と天然記念物を亡滅する事であった（平野、51頁）。

南方の神社合祀反対運動は激烈を極め、和歌山県警察署長を蹴倒して官命抗拒罪に問われ取り調べの18日間を未決監に拘留されることもあった。熊楠はまた、反対運動が挫折しそうになった時ロンドン大学事務総長ディキンズに手紙を書き、実情を訴え、外国の世論を喚起しようとしたが、植物病理学者の白井光太郎（1863～1931）に絶交を迫られ、柳田國男に強く批判されて思いとどまった。二人は日本の恥を外国へさらすべきではないと考えていたのであろう。しかし、一方熊楠は後ほど次のように述べている。「小生が外国学者がわが政府へ勧告書を出すを望むも、今日とはまれば後日にならば何のこともなく思う人も多かりならん。（柳田國男宛書簡、1911年12月14日、『全集』8巻）。その1世紀余後の2015年、朝日新聞（9月17日朝刊）は「熊野古道④」において「熊楠が守った神の森」で、大阪と熊野を結ぶ古道にある田中神社が「南方曼荼羅の風景地」として国の名勝指定に決まったことを大きく報じていた。

南方熊楠の神社合祀反対のエコロジー理論に立脚した地球環境のコズモロジカルな思想の過激な実践活動は、ローカルの問題はグローバルにも共振する「グローバル」思想の必要性を予見していたのであった。日本は、そして日本と世界はいま原発問題で大いに揺れているが、人類の生存をかけるこの緊急問題に対して、日本の宗教者は南方の「事の学」にいかなる「事」が求められているか。「グローバル」な視点からの天理実践教学の真剣な革新的活動が期待される所以である。熊楠の命を懸けた実践活動をたどるなか、「教祖は、『この道は、人間心でいける道やない。天然自然に成り立つ道や。』と、慶応二、三年頃、いつもお話しになっていた。」と伝えられる『逸話篇』の言葉の深みが身に沁みて想い出されるのである。